

SPECIAL ISSUE : 地域に学ぶ観光教育・研究の実践  
実践論文

## 観月会からお月見カフェへ： 中秋の名月を利用した小規模イベントプロデュース実践学習の取り組み

From a moon-viewing party to Otsukimi cafes:  
A small-scale event-producing practice associated with the harvest moon

中串 孝志<sup>1</sup>、木川 剛志<sup>2</sup>、尾久土 正己<sup>2</sup>

Takashi Nakakushi, Tsuyoshi Kigawa, Masami Okyudo

1 和歌山大学観光学部元准教授、甲陽学院中学校・高等学校教諭

2 和歌山大学観光学部教授

キーワード：イベントプロデュース、天文普及、回遊性、プロジェクトマネジメント教育、科学コミュニケーション

Key Words : event produce, popularization of astronomy, rambling activity, project management education, science communication

### Abstract :

Since 2009, we have produced a comprehensive event to develop a variety of content centered on the moon-viewing party on the harvest moon night (August 15th of the lunar calendar), as a practical educational program at our seminar. This is both project-based learning and project management education. At first, we had produced a single moon-viewing event in one place. In order to solve the “free rider” problem and increase the guests’ rambling activity in the local community, we have changed the program to organize “Otsukimi Cafe” event, in which several mini-events associated with the moon are held in the same night in Wakayama City. Email interviews with graduates who served as project managers in the past suggest that they have had a strong impression of project management education. In the future, improvements are needed to mobilize guests from wider segments.

### I. はじめに

著者ら（尾久土・中串）の合同ゼミナールである「科学文化ゼミ」では、ゼミ開設当初より、卒業論文指導とは別に、毎年の中秋の名月（旧暦の八月十五日）の夜に月の観望会を中心に様々なコンテンツを展開するイベントプロデュースを行ってきた。これは、2000年頃から特に盛んになり、初等・中等・高等教育はもちろん企業等でも様々な形で展開されている課題解決型教育（Project-Based Learning: PBL）として、またプロジェクトマネジメント教育（以下 PM 教育）の一つの実践的取り組みとしての位置付けである。

本教育プログラムの PBL としての目的は、少なくとも当初は科学コミュニケーションの実践的理解である。科学コミュニケーションを学ぶコースを開設している大学や研究機関は少なく、それらの取り組みは書籍にまとめられ刊行されている（例えば藤垣・廣野（2008）、千葉・中矢・真島（2007）、国立天文台科学文化形成ユニット（2012）など）。科学コミュニケー

ションは実践的色合いが濃いため多くはアクティブ・ラーニングを取り入れており、PBL 的な実習も多い。例えば北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニットでは「受講生は、教室での授業のほか、ラジオ番組やイベントの制作などの実習を通して、科学技術コミュニケーションの理論から応用に至るまで、幅広い知識とスキルを習得」としている（北大科学技術コミュニケーター養成ユニット, 2007, p.207）。従来、科学コミュニケーション活動の多くは理工系分野の普及の視点に立っているが、イベントプロデュースの形式を使って人文・社会系の視点で科学コミュニケーション活動を捉え直し体得するための PBL であることが我々のプログラムの特徴の一つと言える。

PBL を行っていく中で、そこで扱われる内容そのものの深い理解を目指すこととは別に、プロジェクトをマネジメントしていくことそのものを通じてチームワークに必要なスコープ管理、進捗管理、コミュニケーション、WBS（Work Breakdown Structure）、ステークホルダーとの調整などのいわゆる「社会

人基礎力」の獲得も視野に入れる PM 教育も盛んに行われている。PM 教育は元々は企業で多く行われてきたが、近年では大学でも取り組まれており、CiNii で論文検索を行うと「プロジェクトマネジメント教育」では 151 件（全文検索では 175 件）がヒットし、そのうち「プロジェクトマネジメント教育 大学」と検索すると 100 件（全文検索 152 件）、即ち 6 割を占めることから、学術的にも大学での PM 教育が注目されていることがわかる。和歌山大学では学生の自主性を伸ばそうと、2001 年に学生自主創造科学センター（愛称クリエ）を設置し、学生が自ら課題を設定して学習しそれを単位として認定する「自主演習」の仕組みを全国に先駆けて実施している（森本ほか、2006）。そこでは、より大きなプロジェクトに挑戦するための「自主演習プロジェクト」の制度があり、ものづくりではソーラーカーやロケットなどの製作、地域活動では世界遺産高野山での観光プロジェクトなど多種多様な活動が行われている。さらに、クリエでは様々な科学コミュニケーションの取り組みも行われており、サイエンスカフェや科学まつりなども行っている。このように、科学文化ゼミでの中秋の名月イベントは PM 教育をいわば天体観望会という科学コミュニケーションの現場に掛け合わせるといふ文脈で始められた。

大学が地域と関わる取り組みが盛んに行われているが、その中の大きな潮流の一つが、学生が地域に入って取り組むアクティブ・ラーニングである。地域と大学が連携する「域学連携」の枠組みの中で学生のアクティブ・ラーニング教育プログラム

を行う取り組みは、少なくない大学で行われており、これも書籍にまとめられ刊行されている（例えば小林ほか（2008）、大宮・増田（2007）など）。具体例を挙げると、愛媛大学法文学部総合政策学科地域コース・観光まちづくりコースでは、カリキュラムの中に、講義形式をとらず少人数で実施するアクティブ・ラーニング科目を多く採り入れ、愛媛銀行からの寄付講座の協力のもと、例えば湯布院で定点観測的なフィールドワークを行ったり、商店街ポスター展のプロデュースを行ったりしている（大西ほか、2016）。明治大学商学部は文科省『現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）』に採択されたことを機に、『『広域連携支援プログラム』という内容で 10 のプロジェクトをたちあげ、地域社会への貢献をととして、学生力をアップさせ』、「学生と地域の人たちとの交流をととして、大学で勉強してきた学生の活力を地域社会の進進に役立てるのと同時に、『地域の教育力』で学生を育ててもら」うべく、アンテナショップの経営や浅草のユニーク性に着目したフィールドワーク、長野県飯田市との連携・千代田区と婦恋の連携、本田技研工業との産学連携プロジェクト等の様々な取り組みを行っている（明治大学商学部、2011）。我々の教育プログラムは、先述のような内容を、このような域学連携の文脈を意識して実施しようとする試みでもある。

本稿では、ゼミ開設当初より毎年行われてきたこのイベントプロデュースプログラムの 11 年間の取り組みを紹介・総括する。

表 1 中秋の名月に合わせて開催されてきた過去のイベント。

開催日	主 催	主なコンテンツ	備 考
2005.09.18	NewEar（生涯センター内プロジェクト）	観月ショートトーク 佐藤文隆氏（京都大学名誉教授、甲南大学教授、みさと天文台名誉台長） 観月ミニコンサート 二胡、ピアノ、大正琴 和大留学生による月見お国自慢（予定） お茶会、句会、望遠鏡による「観月」など 先着 200 人に月見団子を無料配布（整理券あり）	みさと天文台では毎年恒例の観月会を開催していたが、この年は NewEar 設立を記念して、和歌山市内の生涯センターで開催した
2006.10.06	NewEar	（前年度を踏襲）	生涯センターの土曜講座の枠で開催 生涯センターの広報では、「センター恒例」の観月会の扱い
(2007.10.23)	(クリエ)	(「十三夜お月見 Cafe」として開催)	
2008.10.14	クリエ	月の観望会 中串&教育学部音楽専攻生によるジャズライブなど	
2009.10.03	NewEar 主催・クリエ協力	お月見ファッションショー（協力：Kiyoko J. [監修・衣装提供]） 望遠鏡による観月 講演「月を観るたび思い出す」（中串） 星座早見盤製作 観光学部生によるお茶会 月見団子の無料配布（整理券配布、先着順）	今回から観光学部学生が参加し企画の中心に クリエの「紀ノ川学カフェ」としても位置付け

表 1 中秋の名月に合わせて開催されてきた過去のイベント（続）。

開催日	主 催	主なコンテンツ	備 考
2010.09.22	クリエ協力	ミニ講演「おかえり、はやぶさくん」（尾久土） 和太ダンスサークル“New Jack”ダンスパフォーマンス& ダンス教室「みんなでムーンウォークをしよう！」など	2009 年 6 月マイケルジャクソン氏死去に インスパイアされムーンウォーク教室を発 案
2011.09.12	科学文化ゼミ	はやぶさ公式 CG クリエイター・池下章裕氏と尾久土 によるトークショー+はやぶさファッションショー（協力： Kiyoko J. [監修・衣装提供]、島精機製作所 [衣装 提供]）など 月の観望会	
2012.09.30	科学文化ゼミ	ハイビジョン映像作品「かぐやと KAGUYA」上映会（協 力：MOON BOY 45 Inc.）など 月の観望会	台風接近に伴う気象警報発令により中 止
2013.09.19	科学文化ゼミ	講演「月の向こうへ ～最新宇宙旅行事情～」（中申） アカベラサークル「和音（かずね）」& 混声合唱団ジョ イントコンサートなど 月の観望会	
2014.09.08	科学文化ゼミ	初の「お月見カフェ」 キャンドル・宇宙人・サイエンス（明石市立天文科学 館館長・井上毅氏と中申の対談と生演奏のコラボイベ ント）・音楽・お月見団子作りをテーマにした 5 つのカフェ 南海電鉄和歌山市駅前と京橋プロムナード（路上） での望遠鏡による月の観望会（協力：みさと天文台）	「観月会」は皆既月食のため別開催 (2014.10.08)
2015.09.27	科学文化ゼミ+木川ゼミ	スペースアート（池下章裕氏による特別講演会、およ び同氏による作品展示）、宇宙人、絵本、プラネタリウム、 音楽、映像をテーマにした 6 つのカフェ まちなか河岸イベント戦国ブース お月見まんじゅう作り体験 京橋プロムナード（路上）に望遠鏡を設置して月の観 望会（協力：紀美野町文化センター天文台ランチ）	「わかやま城下町バル」（前日・同日開催） と連動キャンペーン
2016.09.15	主催：科学文化ゼミ+木川ゼミ ／協力：和歌山大学観光学部 永瀬ゼミ、市駅まちづくり実行 会議、わかやま落語会、ク リエ天体継続観測プロジェクト	月×カクテル、月×マンガ、月×絵葉書、月×パフォー マンス、月×音楽、月×落語、月×天体観測、月× VR の 8 つのカフェ 天体観望会（鷺の森別院、南海和歌山市駅前、 HIDEOUT CAFE）	永瀬ゼミが中心となっている和歌山市駅 周辺での社会実験「グリーングリーン プロジェクト」の一環として開催
2017.10.04	科学文化ゼミ+木川ゼミ	お月見パーティー（ライブ）、路上観月会、お月見ス クール（小学生対象、お月見団子作り+教育学部富田見 彦教授の講演）	「中秋の名月」を楽しむ。をモットーに、 和歌山市ぶらぐり丁内で「月」に関す る 3 つのイベントを同時に開催
2018.09.19	主催：科学文化ゼミ／協力：ぶ らぐり丁理事会、ぶらぐりき っちゃん、インターラーケン、屋 台村、和歌山市立こども科学館、和 歌山大学観光学部北村ゼミ・ 木川ゼミ、クリエ天体継続観測 プロジェクト	「お月見イベント」に拡大 望遠鏡での路上観月会、お月見きっちゃん（お月見団子 づくり）、お月見ロケット（紙工作で遊ぶ）、お月見ト ークショー（尾久土）、月を見ながらのお月見俳句会（協 力：日本文化協会） 和歌山城西の丸広場で開催のイベント「屋台村」に てブース出店	「屋台村」の昼のステージ出演者の紹 介・仲介も担当
2019.09.13	主催：科学文化ゼミ 3 回生／ 協力：ぶらぐり丁理事会、GI -FACTORY、インターラーケン、 KIYORA 和歌山、和歌山大 学食農総合研究所、地域活 性化総合センター、経済学部 足立ゼミ Cafe With、観光学 部北村ゼミ他	お月見流しそうめん、かぐや姫カフェ、お月見麻雀、 竹細工教室、お月見サイエンスカフェ×ワダイノカフェ、 望遠鏡での路上観月会 かぐや姫カフェイベントの PR で和歌山城西の丸広場 で開催のイベント「屋台村」ステージ出演	「かぐや姫カフェ」は一般客参加イベン ト 「お月見サイエンスカフェ×ワダイノカ フェ」は和歌山大学まちかどサテライト のサイエンスカフェ事業とのコラボ企画 「屋台村」の昼のステージ出演者の紹 介・仲介も担当（当日は雨天のため中止）



## II. 実践の概略

### 1. 前史

原型となったのは、著者のひとりである尾久土が台長を務めていた和歌山県紀美野町立みさと天文台で1995年から開催されていた、中秋の名月の観望会「観月会」である。みさと天文台は1995年の7月にオープンし、県外から多くの人たちを集めていたが、天体に関心のない地元住民に山の上にある天文台に来てもらうきっかけとして観月会が計画された。そのために、天体望遠鏡での月面観察や月に関するミニ講義の他に、月をテーマにしたミニコンサート、さらには月見団子や抹茶の無料配布を行っていた。この観望会、講義、コンサート、そして飲食の組み合わせは、尾久土が2003年に和歌山大学に異動してからも続いている。

その後、和歌山大学が関わる「観月会」として、2003年にシンガーソングライターの宝子氏をゲストに招いてのミニ観月会を教育学部屋上で開催し、翌2004年にはみさと天文台での観月会に和歌山大学が協力して開催した。

和歌山大学が主催するようになったのはその翌年の2005年からである(表1)。和歌山大学生涯学習教育研究センター(以下「生涯センター」と記す)内のプロジェクト“NewEar”が立ち上がり、それを記念して生涯センター(和歌山市内)でNewEarが主催する形で開催された。この頃には望遠鏡を用いた月観望会以外に、講演会やミニコンサート等々の様々なコンテンツも組み合わせた「総合イベント」のスタイルが出来上がっている。なおそれらのコンテンツは、単なる月観望会だけよりも誘客力を高めるためでもあり、また、天候不順時の対応策や、晴天時でも月が観望可能な高度まで上ってくるまでの(良い意味での)時間稼ぎにもなっている。この頃の取り組みは富田ほか(2009)に詳しい。その後は実施主体や協力者、イベント内容を変えながら、2013年まで基本的に毎年(2007年のみ開催せず<sup>i</sup>・2012年は気象警報発令により中止、いずれも表1参照)、同様に生涯センターで観月会を開催した。例えば、2005年、2006年、2008年には和歌山大学国際教育教育研究センターの協力を得ており、これらの年にはステージイベント等で留学生が活躍している(東・尾久土, 2009)。

### 2. 科学文化ゼミによる「観月会」プロデュース

科学文化ゼミが企画の中心となったのは2009年からである。イベント自体の企画・物品準備・当日の運営はもちろん、近隣スーパーマーケットからの「お月見団子」提供の交渉、ミニコミ誌等への広告掲載等々、様々なステークホルダーとの調整も全て学生が行う。特に2009年に実施した際のアンケート調査を踏まえ、2010年には若年層を呼び込むために広告媒体を変える等の取り組みを行い、実際に若年層の参加の増加に成功した。このことはこの2年間プロジェクトマネジャーを担当した学生の卒業論文としてまとめられている(小林, 2011)。その後も表1に示す通り、多方面の協力のもと、様々なゲストを



図1 2011年・はやぶさファッションショー&トークイベントより。

招き、様々なステージイベント等を企画していった(図1)。

### 3. 「お月見カフェ」、そして「お月見イベント」へ

2014年には中秋の名月の夜に生涯センターが使えず、10月8日夜に皆既月食があることがわかっていたため、後者を「観月会」として生涯センターで特別イベントを開催し、中秋の名月の夜にはそれとは別の形でイベントを開催することになった。これにはゼミの教育コンテンツとしての「観月会」の抱えていた課題を解決する意味合いもあった(中申ほか, 2016)。

観月会プロデュースの問題の一つは、一部の学生に仕事が集集中してしまう「フリーライダー問題」が起こってしまうことである。また、学生の地域活動としてみた場合、閉じた建物・ホールの中に人が集まるだけで、地域に貢献する面でのインパクトが少ないことも問題と考えられた。ちょうどそのような問題が顕在化してきた頃の2014年は、中秋の名月の日に生涯センターが使えなかったため、それまで開催してきた形式でのイベントプロデュースをやめ、「中秋の名月を楽しむ」をモットーに和歌山市内で「月」に関する複数のカフェでミニイベントを同時に開催する「お月見カフェ」イベントをプロデュースすることにした。従前通り天体望遠鏡を出しての月観望会も同時に開催するが、関連施設敷地内ではなく路上で行う。街中に複数の会場ができることで、人が街中を回遊する効果も狙っていた。春から夏にかけての準備になるため、就職活動・卒業論文準備で多忙な4回生ではなく3回生を中心とし、フリーライダーが生じないように、3回生一人につき1店舗を任せる形を採った(4回生は各店舗の企画のサポートに回る)。店舗との交渉は教員を介さず担当の3回生が直接に行うこととした。この、観月会からお月見カフェへ移行した経緯については、地域での大



図2 2014 年お月見カフェより「宇宙人カフェ」。右側壁際に立つ「宇宙人」は団扇に書かれた文字でお客様と会話する。

学生の観光教育の実践的取り組みの事例として当事者である学生が平成 28 年度関西観光教育コンソーシアム学生活動成果発表会にて発表している（八役・芦野, 2016）。

このような経緯で始まったお月見カフェの初年度は、手作りキャンドル等 5 つのテーマでカフェイベントを開催した。いずれもぶらくり丁近辺であった。サイエンスカフェイベントでは文具店 2F の小ホールを借り、明石市立天文科学館館長の井上毅氏をゲストに迎えたいわゆるサイエンスカフェ（中串がファシリテーター担当）と、ピアノ（教育学部音楽専攻生）・コーラス（和歌山大サークル）・サックス（中串）による月にまつわる楽曲の演奏のコラボレーションイベントであった。また中でも「地球にやってきた日本語の話せない宇宙人が開いているカフェ」という設定の「宇宙人カフェ」（図 2）は人気を博し、メディアにも取り上げられている（わかやま新報, 2014）。翌 2015 年からは著者の一人である木川が主宰するゼミも主催・運営に加わり、各カフェ・拠点でのミニイベントのテーマも「月×落語」（図 3）等の、「月」と何かを掛け合わせる「月×○○」の形に統一した。この年には当日に市中で「わかやま城下町バル」という飲食店を回遊するキャンペーンが展開されており、これと連携していた。2016 年には観光学部の永瀬ゼミが中心となって企画され、南海電鉄和歌山市駅前を起点に展開された社会実験「グリーングリーンプロジェクト」の初日に当たっており、その一環としての位置付けで開催された。2017 年度には 3 回生各人 1 店舗という拘束条件を緩め、月にちなんだ「イベント」を同時開催する方式を採用した。2018 年度にはこの方式からさらに「カフェ」の条件を外し「お月見イベント」と銘打っての開催となった。この年と 2019 年には和歌山城西の丸広場で昼夜に渡って開催されるイベント「屋台村」が同日に開催されるようになっており、独自のイベントに加えて「屋台村」へのステージイベントプロデュース（出演者紹介・仲介、お月見イベントの PR）や出店などの相互協力も行なった。本稿執筆時点（2020 年 3 月）で最新である 2019 年の「竹取



図3 2016 年のお月見カフェ「月×落語」は和歌山市内にある鷺の森別院にて開催された。「高座」に出演しているのは当時の木川ゼミの学生だった「尻切れ亭とんぼ」氏。



図4 2019 年お月見イベントより、ぶらくり丁商店街で実現した手作り竹細工による流しそうめん。

をテーマにしたお月見イベントでは、多方面の協力で実現したぶらくり丁商店街での手作りの竹細工（竹の伐採から担当している）による流しそうめん（図 4）には、一時は最大 50 名超のお客様が一度に殺到する盛況となり、他のコンテンツと合わせて、例年通り今回もメディアにも取り上げられた（毎日新聞, 2019）。

### Ⅲ. 考察

#### 1. イベントの効果・影響

科学文化ゼミは「科学を文化に」を究極の目標として活動しており、その一環として観月会のようなイベントプロデュースを行ってきた。そこではいわゆる人文・社会学系学部の学生ならではの要素を盛り込んだ「科学+a」を重視し、その「+a」の効果を考えてきた。

科学が「文化」の一部になるには、敢えて意識することがないくらい、いつも身近に感じてもらう必要がある。単発のイベ



ントでは効果は薄い。観月会がそのような「科学が文化となるきっかけ」になるためにも、お客様には毎年来て頂きたいし、リピーターになってもらいたい。そのような動機・目的で毎年開催していく中で、我々が経験的に得られた知見の一つは、月見あるいは天文的なことに興味のない人でも、「+a」があれば「ついでに」来てくれることである。これは当然のようだが重要なことである。例えば、先述したように2010年には和歌山大学のダンスサークル“New Jack”によるホールステージイベントを企画したところ、和歌山大学生の参加がかなり増加した。もう一つ典型的な例として、近隣スーパーマーケットから無償提供頂いたお月見団子の配布が挙げられる。当初は、お月見団子配布が始まると、講演会もホールイベントも観望会も全く関係なくお月見団子配布コーナーの前には長蛇の列ができ、混雑対策が必要になったため、受付時にお月見団子配布整理券を規定数だけ配布せざるを得なくなった。そうすると「去年はもらえたから来たのに」との不満の声も聞かれるようになった。これらはメインコンテンツである「月の観望会」ではない要素での誘客力を示している。また後者の例は「+a」によるリピーター獲得の可能性があることも示唆している。当然、「+a」だけで終わってしまえば本末転倒であるため、それをきっかけに来て頂いたお客様の意識をメインコンテンツに向けてもらえるような工夫が必要になるが、ここで無理に「普及」とすると逆効果になることも明らかである。科学普及ではなく科学コミュニケーションの活動という観点から言えば、まずは天文的・科学的コンテンツに触れてもらえるだけでもイベントの目的は達成と言っても良いかもしれない。またこの点については、「+a」の部分の印象に引っ張られ、観月会全体、あるいは天文的・科学的コンテンツに対する印象がよくなることも期待できそうである、という手応えも得ている。

さらに観月会を続けていく中で、我々は、天文イベントによって「ひとが動く」ことを実感し、ここから、天文イベント（ないし、天文にちなんだイベント）によってひとをまちに出させる、回遊性を高めることに寄与できるのではないかと、との着想を得た。このアイデアが、観月会からお月見カフェへ移行する動機につながっている。

お月見カフェは、当初は、ぶらくり丁にひとを連れてくるのが内なる目的だった。そのため、市駅からぶらくり丁への動線を意識してカフェイベント会場として交渉する店舗を選んでいた。その動線にお客様が乗って頂くためにはまず市駅を出たお客様にこのようなイベントが行われていることを知って頂く必要がある。そのために市駅前の広場で人目を引く路上での月観望会を行い、通りすがりに月を見て行って頂くついでにお月見カフェ全体を紹介するチラシを配っていた。しかしそのような誘導や動線に乗って動いてくれたお客様はほとんどいなかったようである。平日だったこともあるだろうが、通りがかっただけの人を急にイベントに巻き込めるものでもないということである。それよりも、ぶらくり丁界隈の「そぞろ歩き」的な人々のほうが

有望そうでもあった。そもそも夕刻にはぶらくり丁界隈には人影が少ないため、少しでもそれを増やすことも考えねばならない。2年目以降は、動線よりも事前のPRを行うことに重心がシフトしていった。

もう一つ、お月見カフェ／イベントの効果として挙げられるのは、特に「音楽カフェ」等の、和歌山大学のサークルが関係するイベントでは、友人関係即ち和歌山大学生の集客があることである。通常であればイベントに「身内」「知り合い」が来るのはあまり喜ばしくはないことが多いだろうが、普段の夕刻のぶらくり丁周辺で大学生が歩いていることはまずないということを経験すれば、せめて和歌山大学生だけでも呼べることは、最初の一步としては意味があると言える。本稿執筆時点ではまだその域を脱したとは言えないが、今後は一般的なイベントとして幅広く集客できることを目指すべきであろう。

お月見カフェ／イベントを社会実験のようなものと見做すと、実験の効果を測定しなければならない。しかし観月会のような単一の会場ではないので、何をどう測定するのかは自明ではない。店舗ごとにアンケートを取ることは必要だが、それで回遊性への影響の程度を見るのは難しい。例えば複数店舗内に定点カメラを設置しておけば、同一人物がどの店舗にきたかを確認することは可能かもしれない（研究倫理的問題があるかもしれないので、その場合には問題回避策が必要である）。

地域再生を目指す策としてのイベントは下策であるという批判は根強い（例えば藻谷・山田, 2016）。批判のポイントはいくつかあるが、主なものとしては「開催にあたっての負担が地元にとって大きいこと」「単発であること」が挙げられる。我々が開催してきたイベントは、地域住民にとっての負担は、イベントの実施そのものは店舗に対する負担は発生するが、それ以外、特に企画・準備等々に関する負担は小さいと言える。我々にとっても教育プログラムである上に学生が主体であるため金銭的にも物質的にもできるだけ負担の少ないあり方を模索ないし創造していくことになる。これは継続性にも寄与する。また教育プログラムであることは継続することへの動機でもあり、さらに「中秋の名月」自体が毎年天文現象であるため、単発にはそもそもなりにくい。

地域の価値を高めることに寄与するかどうかの観点で言えば、和歌山大学はそもそも地方国立大学であり、地域と切り離され得ない存在のはずであるから、大学の持つ「知」を受け継いだ学生が地域に入って活動することは、それがうまく行っている限り、「大学を持つ地域」としての価値を高めることにつながるイベント開催であると言える。逆に言えば、イベントを開催する際には、そのイベントが地域の価値を高めること、地域のQOLを高めることにつながるということが重要であるという視点（例えばホール, 1996）は、大学が学生を地域に送り込んでプロデュースするイベントにおいても当然必要である、と言える。

## 2. 教育的効果：プロジェクトマネジャーの所感

本稿執筆に当たって、本稿執筆時点で既に社会人としての経験がある2009年から2017年までの間にプロジェクトマネジャーを務めた歴代の卒業生に対し、メール等による簡単なインタビューを行った。該当者8名中7名から回答があった。

かつての指導教員との直接のメールやメッセージのやりとりによる調査であること、また自らが経験したことに対する所謂「正常性バイアス」が働いている可能性があることを考慮すれば、そもそもネガティブな回答は無い、または少ないことが当然予想される。従って、回答は、「印象に残っていること」あるいは「ポジティブな要素があるとすれば何か」について述べられていると解釈すべきだろう。また回答が7名分なので意見の多寡には意味がない。

得られた回答は、その全てが「PM教育を通じて身に付ける社会人としての基本的なスキル」に関しての事項を挙げるものであった。具体的には、「言葉遣いや連絡方法」「メールの書き方」「資料の作成」「人員配置」「タイムスケジュールの作成」「今後のTo-doリストを作成し、それをミーティング後に実行していくというサイクル」などが（項目によっては複数人から）挙げられ、それらが「社会人との関わりを持つこと」によって学ぶことができたとされている。また「社会人としての基本的なことを網羅」されているというコメントがあったが、これはイベントプロデュースという総合的で多面的なプロジェクトであることの特徴かもしれない。またプロジェクトチーム全体を統括する面でのコメントも集中しており、「人数が多いと、1つにまとめるのは大変」「人は自分の思いどおりに動かない」「人を巻き込む、頼る、お願いするということ」「上に立つ時は仕事を他人に振る」等のいわゆるソフトスキルの面でのリアルな理解が得られたことが伺えた。

第1節で述べた通り、本プログラムの、教育プログラムとしての要素は3つある。

1. 科学コミュニケーションの理解のためのPBL
2. PM教育
3. 域学連携

「1. 科学コミュニケーションの理解のためのPBL」については、尾久土・中中は元々天文学に関するアウトリーチ活動やサイエンスカフェ等々に取り組んできたので、ゼミ活動としては、科学コミュニケーションの要素、特に天文学の要素は不可欠の要素として認識していた。しかし人文・社会系の学部なので学生は科学的分野の知識・理解に乏しい者やそもそも興味がない者も少なくない。科学コミュニケーションとして活動したとしても、イベント開催までに詰め込んだ知識を自家薬籠中の物とする前に本番を迎え、そのまま忘れてしまうとすれば、接客の場としてのコミュニケーションの理解には寄与するかもしれないが「科学コミュニケーションとは何か」を経験的に理解することには繋がらない場合も少なからずあるだろう。それは容易に予想できることであり、また科学に対する苦手意識を持つ学

生のモチベーションにも関わることであるので、教員もサジェスションを与える際にはあまり科学的な内容（ここでは天体としての月に関する知識）は強くはプッシュしないようにはしていた。従って1の要素は強くはない。

「3. 域学連携」については学生が活動することによって結果的に地域に貢献するようなモデルを想定していたため、指導に当たっても、例えばお客様をどう増やしてどう動かすかについてや、イベント開催により地元の方々の迷惑にならないようにすることについては留意するよう促すことはあったが、地域貢献についてその程度以上に強調はしていなかった。

従って、本プログラムは主として「2. PM教育」として展開していたと言える。元々この教育プログラムは、第1節でも述べたように、学生自主創造科学センターの「自主演習」の枠組みで展開されていたPM教育の発想からきているので、このようなあり方、およびプロジェクトマネジャー経験者からの回答は、自然なこととも言える。また、プロジェクトマネジャーではないプロジェクトメンバー役の学生は、プロジェクト全体や、プロジェクトマネジャーの役割を意識しながらではあるが、基本的には自分の仕事を行うため、マネジメントよりもコンテンツ（本件では科学コミュニケーション）の方に記憶・理解の重心が置かれても不思議ではない。それに対してプロジェクトマネジャーは、具体的にコンテンツに関する作業を行うことはなく全体のマネジメントに徹することを重視する（ものであると中中はPMについて解説していた）。今回の簡易メールインタビュー調査の対象は歴代のプロジェクトマネジャーなので、従って必然的に、PMに関する印象の強い回答が多くなるわけである。

そして実際にその予想に違わぬ回答が寄せられたというのは、本プログラムは、控えめに言って、歴代のプロジェクトマネジャーたちに、教員が力点を置いていたことを意識させる程度にはうまくいった、とは言えそうである。

## 3. 木川研究室の視点

観光学は実学であり机上では理解できないことも体験によって学ぶ必要がある。その前提の下で木川研究室では実践的教育を重視している。社会に飛び込み社会で学ぶこと。社会的課題に取り組む、これはいわゆるPBLであるが多くの事例に見られるように教員のお膳立て、受け入れ先の過大な配慮がなされて“守られた”実践では学生たちは得るものは少ない。必要なことは“当事者意識”である。そのために研究室では短編映画製作、落語、イベントの企画運営を行ってきた。映画製作には出演、撮影、録音など多くの役割があり、一つでも欠けると映画は成立しない。自分の持ち場を学び、責任を感じ、よりよいパフォーマンスを行うこと。ここに学びがある。また、落語であれば学生は高座ではたった一人で演じなければならない。さらにそこには客がいるので力量が足りなければ笑いは起こらず、本人も悲しい思いをする。自分の力量を高めることが必要となる。そして、イベントの企画運営は観光学部の



学生たちに期待される能力と最も相関の高い実践であり、研究室でも最も大事なものとしてきた。ただ、規模が大きいものであれば失敗は許されないもので、教員が責任をもって企画立案を行って遂行し、学生たちに“背中を見せる”教育実践となってしまう。これは時に学生たちから当事者意識を奪ってしまう。そのためには学生たちが主体となるイベントが必要となるが、彼らがやりたいことをやるだけでは社会は存在せず、学生の自己満足のためとなり、悪循環の教育実践となる。お月見カフェに木川研究室の学生たちを参画させたのはこの悪循環を理解させるためであった。学生たちはそれまでも自分たちで企画立案をしてきたが、お月見カフェでは、他の研究室の学生たちが主体となって企画をしているので、本研究室の学生たちは他者が策定したイベントの趣旨の読解と解釈、その中でどのように自分たちの役割を見出し、最適解を見つけるのか、その実践の場となった。一部の学生はお月見カフェのイベント全体の趣旨を理解するが、一部は自分たちのやりたいことだけをやり、その結果は集客もしくは参加者の満足度に如実に表れた。また、そこから学ぶことができるもの、その一連の学習そのものの意味を理解できないもの、それぞれであった。

#### IV. おわりに

本論文では、尾久土・中串・木川がゼミナールの教育プログラムの一環として取り組んできた、観月会からお月見カフェ／イベントに姿を変えながら現在も続く11年間の取り組みの沿革、その中で生じてきた諸問題とその解決に対する取り組みを総括し、さらに取り組みの中から経験的に得られた知見を抽出し検討を試みた。

また本論文では本プログラムの教育プログラムとしての効果を検討するため、過去にプロジェクトマネジャーを務めた卒業生にメールによる簡単なインタビューを実施し、プログラムの効果について検討した。結果としては、PM教育に関する印象が強いようだった。このことは、大学のゼミナールでの教育プログラムとして定期的に開催するイベントプロデュースが、大学の外の社会とのインタラクションの場となり、いわゆる「社会人基礎力」を涵養する機会となり得ることを示唆していると言える。

この取り組みを、全体にせよ部分にせよ失敗事例と捉えるか成功事例と捉えるか、あるいは部分的にその両方か、いろいろな見方があるだろう。

特に将来的に継続・展開していくにあたっての課題を挙げるとすれば、PM教育としてではなく、地域貢献として結果が出せるか、という点が挙げられる。現時点では和歌山大学生を多く呼び寄せることまではできているが、目標の一つである地域の人々の回遊性を高める、という点では不十分である。そういう意味で、今後はさらに次のステップに進んでいかねばならないだろう。

#### References

- 大西ほか, 2016 (大西正志ほか (編著), 『地域と連携する大学教育の挑戦—愛媛大学法文学部総合政策学科地域・観光まちづくりコースの軌跡』, ベリカン社, 353pp., 2016.
- 大宮登, 増田正 (編著), 『大学と連携した地域再生戦略—地域が大学を育て、大学が地域を育てる—』, ぎょうせい, 323pp., 2007. など).
- 国立天文台科学文化形成ユニット編, 『科学プロデューサー入門講座』, 科学成果普及機構出版会, 531pp., 2012.
- 小林英嗣, 地域・大学連携まちづくり研究会 (編著), 『地域と大学の共創まちづくり』, 学芸出版社, 191pp., 2008.
- 千葉和義, 中矢史雄, 真島秀行 (編著), 『サイエンスコミュニケーション 科学を伝える5つの技法』, 日本評論社, 237, 2007.
- 富田晃彦, 尾久土正己, 矢動丸泰, 小澤友彦, 豊増伸治, 2005, 2006 年度観月会とその参加者層, 和歌山大学生涯学習教育研究センター年報, 7, 9-13, 2009.
- 中串孝志, 八役奈央, 尾久土正己, お月見カフェイベント—和歌山大学観光学部での取り組み—, 天文教育普及研究会近畿支部集会 (京都教育大学 藤森キャンパス), 2016.
- 東悦子, 尾久土正己, 留学生と地域の人々—国際交流と国際理解, 和歌山大学国際教育教育研究センター年報, 5, 57-66, 2009.
- 藤垣裕子, 廣野喜幸 (編著), 『科学コミュニケーション論』, 東京大学出版会, 285pp., 2008.
- 北海道大学科学技術コミュニケーション養成ユニット (CoSTEP) 編著, 『はじめよう! 科学技術コミュニケーション』, ナカニシヤ出版, 216pp., 2007.
- ホール, コリン・マイケル (1992) (須田直之・訳), 『イベント観光学—イベントの効果、運営と企画』 (青森大学双書), 信山社出版, 264pp., 1996.
- 毎日新聞和歌山地域面「和歌山と月見を満喫 城などでイベント『竹取』テーマに」, 2019年9月18日.
- 明治大学商学部 (編), 『これが商学部シリーズ Vol.2 社会に飛び出す学生たち 地域・産学連携の文系モデル』, 同文館出版, 234pp., 2011.
- 藻谷浩介, 山田桂一郎, 『観光立国の正体』, 新潮新書, 272pp., 2016.
- 森本吉春, 宮永健史, 尾久土正己, 藤垣元治, 和歌山大学学生自主創造科学センターにおける自主性創造性教育方法の開発と推進, 工学教育, Vol. 54, No. 3, 29-34, 2006.
- 八役奈央, 芦野慈恵, 「お月見カフェ」と地域活性, 平成28年度関西観光教育コンソーシアム学生活動成果発表会, 於: 阪南大学あべのハルカスキャンパス, 2016.09.09.
- わかやま新報, 「和歌山の宇宙人カフェ ぶらり丁」, 2014年09月09日, [https://www.wakayamashimpo.co.jp/2014/09/20140909\\_42167.html](https://www.wakayamashimpo.co.jp/2014/09/20140909_42167.html) [2020年3月31日確認].

#### 注

- i 生涯センターとして開催していないが、学生自主創造科学センター (現・協働教育センター) 主催で2007.10.23に「十三夜お月見 Cafe」が開催されている。

受理日 2020年6月11日